

演題名：飼料中への抗菌剤および生菌剤の投与が北海地鶏Ⅱの育成初期の発育へ及ぼす影響

○國重享子 1・藤川朗 1・仙名和浩 1・二階堂聡 2・中村直樹 1（道立畜試 1・全農畜産サービス(株)2）

【目的】食の安全安心から抗菌剤等を使用しない鶏肉生産が注目を集めており、北海地鶏Ⅱの差別化を図る上でも重要である。ブライターでは疾病や発育低下が知られているが、北海地鶏Ⅱでの影響は明らかとなっていない。そこで抗菌剤の投与および生菌剤投与の有無が育成初期の発育や腸内菌数に及ぼす影響を検討した。

【方法】試験 1:抗菌剤添加が北海地鶏Ⅱ雛の発育や腸内の大腸菌数等へ及ぼす影響を検討した。供試鶏は北海地鶏Ⅱの初生雛雄 20 羽、雌 20 羽を用いた。試験区は硫酸コリスチンを 10mg/kg 飼料に添加した区(添加区)と添加しない区(無添加区)とし、35 日齢まで 5 回に分けて段階的にと殺して盲腸と直腸内容物を採取し、大腸菌と大腸菌群数を調査した。試験 2:生菌剤添加が北海地鶏Ⅱ雛の発育や腸内の乳酸菌数等へ及ぼす影響を検討した。1 区当たりの供試鶏および処理は同様とした。試験区は硫酸コリスチンを添加した区(添加区)、添加しない区(無添加区)、乳酸菌系生菌剤を 1.0×10^6 個/g 飼料に添加した区(生菌区)、生菌区のにオリゴ糖を 50mg/kg 添加した区(生菌+オリ区)とし、大腸菌、大腸菌群数および乳酸菌数を調査した。

【結果】試験 1：35 日齢の体重は雄で添加区が 775g、無添加区が 665g、雌で添加区が 645g、無添加区が 568g と無添加区が有意に低かった。盲腸内の大腸菌数は 7 日齢で、大腸菌群数は 21 日齢で無添加区にやや高い傾向がみられた。直腸内の大腸菌数と大腸菌群数に差はなかった。試験 2:35 日齢の体重は雄では添加区 776g、無添加区 673g、生菌区 672g、生菌+オリ区 686g と添加区が有意に高かった。雌では添加区 612g、無添加区 526g、生菌区 527g、生菌+オリ区 597g であり、添加区がやや高かったが有意な差はなかった。盲腸内の大腸菌数は 3 日齢と 7 日齢で添加区が低い傾向にあったが、大腸菌群数に差がなかった。直腸内では大腸菌数は 3 日齢と 14 日齢で、大腸菌群数は 3 日齢で添加区が低い傾向にあった。乳酸菌数は盲腸、直腸内ともに生菌区と生菌+オリ区が高い傾向にあった。

以上より、北海地鶏Ⅱにおいても抗菌剤の投与により育成初期の発育が向上したが、生菌剤による発育改善は認められなかった。